

特別・記念講演企画

＜特別講演＞

実行委員会企画：特別講演：「学士力と単位の実質化」

講師：高橋 浩太郎（文部科学省 高等教育局 専門教育課 専門職大学院室 推進係長）

日時：8月27日（月） 13:10～15:00

企画代表：児玉 英明（京都産業大学）

司会：植松 茂男（京都産業大学）

概要：第6期中央教育審議会大学分科会大学教育部会では、学士課程教育の質的転換を促進するための諸方策について議論を行ってきた。そのためには、「質を伴った学修時間の実質的な増加・確保による主体的な学びの確立」に取り組む必要がある。大学教育部会では、審議のまとめとして、『予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ』を発表し、学士力と単位の実質化に着目している。

特別講演では、高橋浩太郎氏（文部科学省高等教育局）を招き、「学士力と単位の実質化」をテーマに、大学教育の課題を論じていく。

1. 【講演】高橋 浩太郎（文部科学省）「学士力と単位の実質化」（45分）
2. 【質疑応答1】小野 博（福岡大学）（5分）
3. 【質疑応答2】穂屋下 茂（佐賀大学）（5分）
4. 【質疑応答3】中園 篤典（広島修道大学）（5分）
5. フロア討論（30分）

＜記念講演＞

実行委員会企画：記念講演：「キャリア教育と高大接続」

講師：荒瀬 克己（京都市教育委員会 教育企画監、前京都市立堀川高等学校 校長）

日時：8月28日（火） 13:30～14:40

企画代表：椋本 洋（立命館大学）

司会：岡 毅（立命館大学）

概要：中教審メンバーとして新課程の目玉である「キャリア教育」についての見解と、現在お蔵入りになっている「高大接続テスト」など豊富な話題に言及される予定。

1. 【講演】荒瀬 克己（京都市教育委員会）（60分）
2. 【謝辞】穂屋下 茂（日本リメディアル教育学会 会長）（10分）

## 各部会・実行委員会・その他企画

### 大会 1 日目

<企画・発表 I>8月27日(月) 15:10~17:10

#### 1. ICT 活用教育部会企画：ラウンドテーブル：「単位の実質化と ICT 活用」

日時：8月27日(月) 15:10~17:10

企画代表：小松川 浩(千歳科学技術大学)・穂屋下 茂(佐賀大学)

司会：穂屋下 茂(佐賀大学)

概要：

最近、大学教育の質の問題がクローズアップされつつあり、特に初年次の教育の在り方が問われてくると思われる。そこには、入学前教育、プレースメントテスト、リメディアル教育も含まれる。特に、単位の実質化(2単位=30時間授業+60時間学習)が問題である。これを実現するのは容易ではないが、ICTの高度な利用があってはじめて可能になるとと思われる。本会では、問題点や推進戦略を討論しながら、具体的な可能性を模索する。

講師と題目：

- (1) ラウンドテーブル『単位の実質化と ICT 活用』の趣旨説明(5分)
- (2) 小松川 浩(千歳科学技術大学)「eラーニング協議会の役割」(15分)
- (3) 佐藤 真久(山梨大学)「eラーニング実践例」(15分)
- (4) 望月 雅光(創価大学)「ラーニングポートフォリオの構築」(15分)
- (5) 山田 礼子(同志社大学)「教学 IR」(15分)
- (6) 登壇者4名+高橋 浩太郎(文部科学省)「ディスカッション」

#### 2. ワークショップ：「Readers Theatre 方式による英語学び直し授業のための読解と音声表現」

日時：8月27日(月) 15:10~17:10

企画代表：浅野 享三(南山大学短期大学部)

司会：浅野 享三(南山大学短期大学部)

概要：「英語が話せるようになりたい」という学生の希望がある。しかし高校で音読や音声表現を学べなかったという学生は少なくない。また、大学卒業までにスピーチやディベートが堪能になる学生も多数派とは言い難い。話せるようになるための橋渡しとして Readers Theatre(音読劇)を活用した1・2年生向け授業の一例を紹介する。今回は、ワークショップ形式を取り、実際の授業のように協同作業をしながら、原文読解から RT 用台本化、練習、発表までの全過程を体験する。ビデオによる学生発表または実演の予定あり。30名限定。

## 大会 2 日目

<企画・発表 II>8月28日(火) 9:30~11:30

3. 学習支援部会企画：シンポジウム：「学習支援のための環境づくり」

日時：8月28日(火) 9:30~11:30

企画代表：小川 洋（聖学院大学）

司会：小川 洋（聖学院大学）

概要：学習支援センターなどの名称で全国的に設置が広がっている学習サポート組織は、多くの場合、取りあえず学内の空いているスペースに、十分なレイアウトの検討もなく、置かれている。今後このような組織の重要性はますます大きくなり、適切な施設・設備の在り方が検討される必要がある。また、図書館も情報がデジタル化されつつあることから、その再構築がすすめられている。教員や学生にとって、より好ましい学習サポートの環境について、アメリカの大学の事例なども含め、教育工学の専門家からの情報提供を受けながら、どのような課題があるのか検討する。

講師と題目：

- (1) 小川 洋（聖学院大学）：企画の趣旨説明と登壇者の紹介（5分）
- (2) 鈴木 克明（熊本大学）「これからの大学に求められる学習環境の整備はどうあるべきか」（50分）
- (3) 吉岡 路（立命館大学）「新しい学びの場としてのデジタル情報時代の図書館のあり方」（20分）
- (4) 高橋 大介（名桜大学）「学習支援の体制を整備する～言語学習センターおよび数理学習センター運営の経験から」（20分）
- (5) 休憩・質問紙受付（5分）
- (6) シンポジストによる回答と質疑・自由討議（20分）

<昼休み特別企画>

学習支援部会企画：立命館大学衣笠校舎図書館ツアー

日時：8月28日(火) 12:30~13:00

12時半に受付前集合（1F コミュニケーションラウンジ：自由参加）

企画代表：小川 洋（聖学院大学）

概要：

衣笠校舎図書館に2011年4月、学生たちの自立的な学習のための空間「びあら」がスタートしました。学生たちを支援するスタッフも配置されています。2日目午前の「学習支援のための環境づくり」でパネリストとして報告していただく吉岡路さんは、この「びあら」開設の事業に携わってこられ、シンポジウムでも、その経験をもとにした報告をしていただきます。大学図書館のご厚意により見学の機会を提供していただきました。関心をお持ちのかたはご参加ください。図書館スタッフに施設を案内していただきます。なお当日は、この時間帯以外でも、学会参加のネームプレートを提示することによって館内の見学は可能です。

「びあら」の主要な施設は以下の通り。

- ・「グループワーク」エリア（グループ学習用大型ディスプレイ付パソコン 9 台／可搬型プロジェクター複数台／スキャナ 2 台）
- ・「パソコン」エリア（情報検索やメールチェックなど短時間利用 パソコン 20 台／プリンター1 台）
- ・「プレゼンテーションルーム」（大型スクリーンとプロジェクター設置）
- ・「IT・情報検索サポート」カウンター
- ・「ノートパソコン貸出」カウンター（無線LAN 対応 図書館内利用限定 90 台）
- ・各種講座・セミナー企画実施スペース

#### 4. 日本語部会企画：ラウンドテーブル：「自ら学び、社会に生きる人材となるための教育とは=親身とフシンセツ=」

日時：8月28日（火）9:30～11:30

企画代表：たなか よしこ（日本工業大学）

司会：馬場 真知子（東京農工大学）

概要：日本語部会では、学生にとっての母語である日本語の学習について、それをどのように学習者に動機付けするか、自律的に学ぶ力をつけるかについて取り組んできている。本ラウンドテーブルでは日本語を運用する力をつけるための具体的な考え方について、教育現場の先生方の声を中心に集め、その意見を共有することで、今後の学習を進めさせるための方策についてディスカッションを進める。（最新の詳細はHP上でご確認くださいませようお願いします。）

#### <企画・発表 III>8月28日（火）14:50～17:50

#### 5. 実行委員会企画：シンポジウム：「学習支援における教職協働の営み」

日時：8月28日（火）14:50～17:50

企画代表：椋本 洋（立命館大学）

司会：吉岡 路（立命館大学）

概要：昨今、設置形態に関わらず多くの大学が、新入生からの基礎的学力や学びの意欲の多様化に起因する課題に直面している。そして同課題に対して、特別入試合格者等、早期合格者に対する入学前教育から入学後の初年次教育や学習支援まで、高校から大学への学びの転換をはかるための様々な施策が講じられている。

その施策や提供される教育プログラムには、既に30年以上の前から北米の高等教育がそうであったように、部門間を跨る形で、「時間軸として『継続化』」「プログラムとしての『総合化』」が求められることが多い。そして、部局間を跨る施策を成功に導くためには、「国内外の先進的なプログラム」を参考にしつつ、「各大学の特性に応じた教育プログラムやシステム開発」、「学内外のネットワーク」、そして「高い組織内マネジメント」が要求される。

本シンポジウムでは、このような高等教育の分業化・専門化・高度化するミッションと課題に対して、構成員である教員と職員がどのように役割を分担、協働し、大学組織に課された責任を担っていくのかについて考える。基調講演では教職協働の歴史を、シンポジストからは各大学における実践面からの課題提起を行なって貰うことで、今後の学習支援における教職協働の在り方の示唆を得る

講師と題目：

(1) 大島 英穂（立命館大学 教学部 事務部長）

【基調講演】「立命館大学における教職協働の歴史と現在」（30分）

休憩（5分）

(2) 浅野 昭人（立命館大学 学生部 次長）「グローバル人材養成を通じた教職協働」（20分）

リーマンショック以降、わが国でもグローバル人材へのニーズは急速に高まっている。しかし、明確なグローバル人材の定義を持つ企業は少なく、育成プログラムも未整備な状況にある。このため、大学が育成するグローバル人材像を定め、産業界の協力を得て、教職協働でプログラムを開発することは大きな意味がある。本報告では、本学が2010年度から取り組んできた「グローバル人材養成プログラム」の取り組みを紹介し、教職協働をどのように実践してきたのかを報告したい。キーワード：「国内外の先進的なプログラム」、「学内外のネットワーク」

(3) 江島 定人（九州大学 学務部 部長）「国立大学における教育改善と教職協働」（20分）

国立大学では、法人化後、学長のリーダーシップのもと改革が進んでいる。改革の背景には、教育の質の向上を求める社会の様々な要請があるものの、それを超えて、自律的に改革に向き合うことが重要である。

今回は、九州大学における教養教育の改革である「基幹教育院」に関する改革事例等について、教職協働の観点から踏まえつつ、お話したい。キーワード：「教養教育」「組織改革」「教職協働」

(4) **野田 修** (東京経済大学 学生支援部 部長) 「東京経済大学 学習センターの実践と職員の役割」 (20 分)

東京経済大学の「学習センター」は、「全学生がTKU ベーシック力 (10 のチカラ) を身につけるために、気楽に立ち寄り、気軽に相談できる学生・教職員の学びの交流スペース」をめざし、全学横断的な「学生(・・)支援(・・)会議」のもとに、「各分野の専任教員相談員」を中心に、「入学から就職までの9部署の職員サポーター」との連携により5年間運営してきたが、中規模・中位の文系大学における多様化した学生への対応例として報告する。

(5) **中井 俊樹** (名古屋大学 高等教育研究センター 准教授) 「大学を越えた教職協働による研修教材の開発」 (20 分)

FD・SD 教育改善支援拠点事業の一環として、名古屋大学では『大学の教務Q&A』を2012年3月に刊行した。同書は、学内外の教職員のネットワークを通して現場から教務の知識を収集して整理した研修教材である。国による指針の解説とは異なり、大学側から教務の知識を広く発信するという点に特徴があると言える。本報告では、同書を作成する経緯を教職協働の観点から振り返ることで、教職協働のあり方についての議論のきっかけを提供したい。

**休憩** (10 分)

(6) **椋本 洋** 【論点整理】 (10 分)

(7) **パネルディスカッション・会場からの質疑応答** (45 分)

## 大会3日目

### <企画・発表 IV>8月29日(水)9:30~11:30

#### 6. コミュニケーション能力育成部会企画：シンポジウム：「コミュニケーション能力」の測定方法の開発と育成方法の展開

日時：8月29日(水)9:30~11:30

企画代表：小野 博 (福岡大学)

司会：穂屋下 茂 (佐賀大学)

概要：入学前教育、初年次教育、リメディアル教育に際し、コミュニケーション能力の果たす役割が注目されている。そこで、JADEに専門部会を設け測定方法の確立、能力を高める方法の開発などを目指している。また、就活においてもコミュニケーション能力の育成が求められており、現状について報告し、多くの会員の意見を求めたい。

講師と題目：

- (1) 小野 博 (福岡大学)「大学生に求められるコミュニケーション能力と育成方策」(15分)：大学生には学習・就活場面を始めあらゆる場面でコミュニケーション能力が求められている。近年、その著しい低下が指摘されているが、役者の養成手法を利用した育成方法を紹介する。
- (2) 工藤 俊郎 (大阪体育大学)「学習型コミュニケーション能力の評価テスト開発と調査結果」(15分) 学習型コミュニケーション能力の評価テストの開発の経緯と、12大学、約2千人の調査結果を分析した所、教員の印象と一致した。
- (3) 青柳 達也 (福岡大学)「国内及び海外の大学におけるコミュニケーション能力の育成」(15分) 内外の大学におけるコミュニケーション能力育成の原理と実際の活動を紹介する
- (4) 田中 周一 (昭和大学)「医系大学における学習型コミュニケーション能力(SCA)の果たす役割」(15分) 医系大学ではOSCE(模擬診療を含む)と呼ばれる能力試験がある。他方、現場における患者とのコミュニケーションの重要性が増している。この現況をふまえ、能力育成方法の試みについて報告する。
- (5) 塚本 真也 (岡山大学) シンポジスト「大学及び社会から求められるコミュニケーション能力の果たす役割」(15分) 経団連の調査で社会はコミュニケーション能力の高い学生を求めている。また、実際の就職における状況について報告する。

#### 7. その他企画：ラウンドテーブル：「リメディアル教育を語り合う」

日時：8月29日(水)9:30~11:30

企画代表：児玉 英明 (京都産業大学)

司会：児玉 英明 (京都産業大学)

概要：ユニバーサル段階に移行し、多様な学生が大学に入学してきているという現実がある。中央教育審議会『学士課程教育の構築に向けて』には、「補習・補完教育の広がりや安易に是とすることはできないが、大学として、自らの判断で受け入れた学生に対し、その教育に責任を持って取り組むことは当然であり、必要に応じて補習・補完教育や初年次教育等の配慮を適切に行っていかなければならない」という記述がある一方で、「ただし、高等学校以下のレベルの教育を計画する場合、教育課程外の活動として位置付け、単位認定は行わない取り扱いとする」という記述もある。この記述は、リメディアル教育の実践者にとっては、ディレンマである。多様な学生と日々向き合い、格闘しているリメディアル教育の実践者は、『学士課程教育の構築に向けて』の主張を、どのように捉えるべきか。例えば、高等学校以下の教育と大学教育の間の線引きなど、そう簡単にできるものなのだろうか。リメディアル教育とは中学校や高校の補習のみを指すのだろうか。780ある大学の中で、リメディアルと一言と言っても、その内容は簡単には定義できないぐらい相当に多様なものではなからうか。本企画は、リメディアル教育とは何かを根源的に問い直すものである。そして、我々は、なぜ日本リメディアル教育学会に集っているのかを問い直すものである。

## 講師と内容：

### (1) 高松 正毅 (高崎経済大学) (20分)

どこまでも大学教育の本来の在り方に固執するのであれば、本来の大学教育に適応可能な者のみを大学生と認めるしかなく、そのためには大学はごく一部のみを残し、他は全て廃止することになるであろう。多くの大学が主として経営上の要請から学生数の確保を優先せざるを得ないというのが現状である。そして、受け入れた学生が、いずれは社会に出て行く以上、大学は教育機関の最後の砦として、また教員は教育者として、その責務を全うしなければならない。つまり、リメディアル教育を施すことは、ほとんどの大学にとって責務であると言って良い。

### (2) 長尾 佳代子 (大阪体育大学) (20分)

今回の報告においては、大阪体育大学で実施している「日本語技法」の授業を例に、高等学校以下のレベルの内容を含むリメディアル教育が学士課程教育を支え、これに直接寄与していることを数値データで示す。また、その実例を通して、大学教育と検定教科書に基づいて行われる高等学校以下の教育との間には単なる難易度の差ではなく、質的な違いがあることも示す。そこでは、大学教育の一環として行われるリメディアル教育は高等学校までの教育の単なるやりなおしではないということも同時に示したい。

### (3) 谷川 裕稔 (四国大学短期大学部) (20分)

日本における高等教育場面で、特に第1 学年で使用されてきた (いる) 学習支援関連用語は、近年「初年次教育」と「リメディアル教育」に収斂されつつある。が、初年次教育とリメディアル教育の概念枠組みの範囲が明確に線引きされているわけではない。例えば、日本リメディアル教育学会の対象年次および研究内容と初年次教育学会のそれらとは大部分重なっている。そこで、両概念を峻別する作業を通して、リメディアル教育の学士課程教育における位置づけを提示する。

### (4) フロア討論：(60分)

三報告を踏まえて、参加者全員で、リメディアル教育を語り合う。

## <企画・発表 V>8月29日(水) 13:00~15:00

### 8. 英語部会企画：シンポジウム：「英語リメディアル教育について私はこう考える」

日時：8月29日(水) 13:00~15:00

企画代表：酒井 志延 (千葉商科大学)

司会：清田 洋一 (明星大学)

概要：英語のリメディアル教育は、今や大学での大きな問題となっている。しかし、これとって効果的な教育方法は開発されておらず、リメディアルの英語教育を担当する教員は日夜努力しているが、その努力は必ずしも報われているとは言い難い。そこで、本シンポジウムでは、4名のシンポジストに自分が信じるリメディアル教育について、発表していただき、会員ともに深め、今後のリメディアル教育の発展に寄与することを目的とする。

## 講師と題目：

- (1) 牧野 眞貴 (近畿大学)「楽しいからもっと学びたくなる英語リメディアル教育—教師の授業デザイン力で学生が変わる—」(15分+5分=20分)
- (2) 鈴木 政浩 (西武文理大学)「英語コミュニケーション、楽しいだけでよいのだろうか」(15分+5分=20分)
- (3) 石井 研司 (立命館大学)「課題遂行と自己効力感を軸にした英語リメディアル教育—様々なアプローチによる授業デザインで“心のケア”—」(15分+5分=20分)
- (4) 平野 順也 (金沢星稜大学)「外部試験を利用した英語リメディアル教育—目標、成功、そして投資—」(15分+5分=20分)
- (5) フロア討論 (20分+20分=40分)

## 9. その他企画：ラウンドテーブル：「教育広報のあり方を考える」

日時：8月29日（水） 13：00～15：00

企画代表：中園 篤典（広島修道大学）

司会：長尾 佳代子（大阪体育大学）

概要：大学発信の広報と異なり、報道は大学側に好意的なものばかりではない。そこで、大学によっては取材を拒否したり、逆に広報によって報道をコントロールすることを試みたりする場合がある。本企画では、まず、大学をめぐる広報や報道について立場の異なるパネリストたちが現状報告を行う。これをもとにそれぞれの「発信したい情報」「発信したくない情報」について整理し、さらに会場の聴衆と討議する。大学人と報道関係者が教育実践の情報公開において果たすそれぞれの社会的役割について考察していく。

講師と題目：

### (1) 中園 篤典（広島修道大学）：「リメディアル教育の情報発信について」（15分）

リメディアル教育は、学生の意欲の問題が根底にあるため、教員は、学生の興味を引くため、必要に応じて奇手を用いることがある。しかし、そこだけを報じられると、教育全体の誤解を広げてしまう危険性がある。この点を、具体的な事例を元に述べたい。筆者の授業は、ある全国紙において特集記事（「大学淘汰」）の一部として報じられた（2006年12月）。RTでは、その経緯と報道内容を示した上で、実際の記事で紹介された教材と授業内容について解説をする。また、報じられたことによる影響についても述べる。

### (2) 廣井 徹（立命館大学）：「戦略的大学コミュニケーション～大学広報において大事な三つのR～」（15分）

WEBの登場によって、人が受け取ることが可能な情報量は600倍とも800倍にもなったと言われる。この激変したコミュニケーション環境において、自分と関係ない情報は見逃される。大学が発信する情報をいかにしてステークホルダーに関心をもって受け取ってもらえるか？受け手の興味関心にスイッチを入れる「情報の自分事化」をどう設計するか、コミュニケーションプランニングの柱となる3つのR（Relevance、Relationship、Reputation）について報告する。

### (3) 児玉 英明（京都産業大学）：「教育情報の公表義務化とリメディアル教育」（15分）

リメディアル教育や修学支援は、学生が多様化すればするほどその重要性が増すにもかかわらず、大学としての組織的対応が後手に回るケースが多い。しかし、重要であるにもかかわらず対応が不十分な大学が多いのであれば、逆にいち早く対応に着手した大学にとっては教育力を発信する契機にもつながる。

リメディアル教育に関する対応が後手に回っているうちに、大学の外では「退学率」や「標準修業年限卒業率」といった数値データが、新聞紙上で大学別に公開される段階に至っている。教育情報の公表が進む今日において、大学が留意しなければならないことは、退学率などのネガティブな数字だけが、マスコミを通じて、世間を独り歩きすることである。ネガティブな教育情報を数値で公開する流れが、もはや避けられないのであれば、その数値を改善するために、大学はどのような学習支援策を実施しているのかを同時に示さなければならないだろう。教育情報の公表が義務化された今日において、リメディアル教育を教員個人の取組みとして発信する段階は終わり、これからは大学による組織的な取組みとして発信する段階に来ている。本報告では、京都産業大学を事例にして、リメディアル教育の情報発信戦略を検討する。

### (4) 上島 誠司（朝日新聞大阪本社）：「大学の説明責任と社会的貢献について」（15分）

他のパネラーの方々の意見に、一般人に近い在野の立場で発言したい。

### (5) フロア討論(60分)

大学関係者3名の事例報告と学外者1名のコメントを元に、現代の大学生に求められるレベルとは何か、リメディアル教育はそれにどう関わるのか、それらをどう情報公開していくのか(大学の意義)等の論点について、フロアの大学関係者と意見交換を行いたい。できるだけ個々の事例にこだわるのではなく、それをきっかけとしてより広い視野に立った議論を喚起したい。